



故 紺野 昌俊先生

公益社団法人日本化学療法学会 名誉会員  
1927年10月6日 旧満州・大連市で生れる  
2021年3月30日 ご逝去（行年93歳）

## 御略歴

---

---

### 【学歴・職歴】

- 1953年 日本医科大学卒業  
1960年 医学博士（東京大学）  
東京大学医学部附属病院分院小児科勤務を経て  
1971年 帝京大学医学部助教授  
1980年 同大学医学部教授  
1993年 同大学医学部名誉教授  
その間、日本私立医科大学協会教育委員会委員長等を歴任

### 【学会・社会活動】

- ・日本化学療法学会・日本臨床微生物学会（理事，理事長，学会長）
- ・日本感染症学会（理事・学会長）
- ・日本環境感染学会（理事）
- ・日本小児科感染症学会，日本臨床薬理学会（評議員）
- ・厚生省中央薬事委員等を歴任

### 【受賞歴】

- ・1986年 日本感染学会 二木賞受賞  
（受賞対象：薬剤耐性型とファージ型からみたメチシリン耐性黄色ブドウ球菌の研究）
- ・1992年 日本化学療法学会 志賀潔・秦佐八郎記念賞受賞  
（受賞対象：MRSAに関する一連の研究）

### 【主な著書】

- ・新・抗生物質の使い方：清水喜八郎・紺野昌俊共著（医学書院）
- ・MRSA 感染症のすべて 改定版：紺野昌俊編（医薬ジャーナル社）
- ・改訂ペニシリン耐性肺炎球菌：紺野昌俊・生方公子共著（協和企画通信）
- ・抗菌薬療法の考え方（第1巻～第3巻）：紺野昌俊著（（株）ミット）
- ・インフルエンザとインフルエンザ菌：紺野昌俊著（自費出版）
- ・急性呼吸器感染症三大起炎菌その変遷と未来は？：紺野昌俊著（自費出版）
- ・感染症・老医師の回想録：紺野昌俊著（自費出版）

## 紺野昌俊先生を偲んで

紺野昌俊先生におかれましては、令和3年3月30日に心不全によりご逝去されました。1927年（昭和2年）生まれの先生は、多感な10代後半の時期に第二次世界大戦と終戦という激動期を過ごされ、旧満州・大連市から日本に戻られ苦学して日本医科大学を卒業されました。その直後、肺結核を患われ2年間の療養生活を経て臨床医の道を歩みだされたと、随筆集「感染症・老医師の回想録」に記しておられます。

先生は長年多くの学会で指導的な役割を果たされてこられました。特に日本化学療法学会との繋がりは深かったように思います。

先生は新設された帝京大学医学部・学内においては附属病院副院長、学生部長、教務部長、医学部長補佐などまさに縁の下の力持ちとして、先生でなければ不可能であった実質的責任者として新設大学を軌道に乗せることに全精力を傾けておられ、傍から見てもストレスの多い日々を送られました。恐らく先生であるからこそ、それらをこなせたものであると思います。先生は臨床にあつては、早朝7時には病棟へ出向かれ、入院している小児の朝食状況をつぶさに観察して臨床経過を推し計り、すべてのカルテに目を通して不足している検査事項をメモ紙としてカルテに挟み、9時には研究室に戻られて仕事をされておられました。9時前後に出勤する私などは恐らく不肖の弟子であつたに違いありません。

以下には社会活動としての先生の学問的御業績とそれをベースにして本学会に対して尽力なされたことを記したいと思います。

先生の御研究は、医学部ご卒業後に縁あって当時東京大学医学部附属病院分院小児科医長であつた藤井良知先生（第24回の本学会・会長）の下で「インフルエンザ菌」の研究から始まっています。その後、著しく盛んとなった抗菌薬開発の中で、新規アミノ配糖体系薬やセフェム系薬などの評価を基礎と臨床の両面から scientific に行われ、早くからセフェム系薬の在り方には警鐘をならしておられました。また関連した書籍も著しておられます。

私どもが帝京大学へ異動してから10年ほど経過した1983年2月、先生は当時細菌検査部も担当しておられましたが、検査技師から見せられた薬剤感受性を測定した1枚のシャーレを研究室へ持参されました。いわゆる「2重リング現象」であり、それがMRSA研究に繋がりました。この時期は、ちょうどわが国が高度経済成長期を迎え、人々の生活は豊かになり平均寿命も延び、加えて国民皆保険制度の恩恵で抗菌薬が潤沢に使用できる状況が背景にありました。2重リング現象の本質は、耐性化しやすい黄色ブドウ球菌における新たな細胞壁合成酵素、すなわち *mecA* 遺伝子にコードされた PBP-2' にあることを明らかにし、MRSA 関連の論文が総計11編、英文論文として報告できました。これら一連の論文の被引用率は、論文あたり100を超えています。MRSAの研究によって1992年に「志賀潔・秦佐八郎記念賞」、1986年に「二木賞」を受賞されておられます。また、先生は1989年（平成元年）に第37回日本化学療法学会・会長をつとめられておられます。

その後、MRSAは院内感染菌の象徴として社会的な問題となりました。この問題を契機として、1993年（平成5年）に厚生省からの委託事業である「院内感染講習会」が日本感染症学会で始まっております。また、日本環境感染学会も東京慈恵会医科大学名誉教授・上田泰先生を中心に日本であまり理解されていなかったAIDSやあらたな感染症を対象とする学会として1986年に極めてタイムリーに創設されましたが、その中にはMRSAも含まれておりました。

紺野先生が本学会の理事長としてなされた最大のレガシーは、1995年（平成7年）に「Journal of Infection and Chemotherapy」を日本化学療法学会の Official Journal として本学会単独で発刊にこぎつけられたことにあります。身近にいて投稿規定などの作成をお手伝いしましたが、先生は「日本の研究者は優れた研究をしていながら論文のまとめ方や語学にハンディがあり過ぎる。どうしても英文の Journal が必要である。そしてできるだけ早く IF を取得する」ということを明言しておられました。ちなみにインパクトのある表紙は五島瑳智子先生（東邦大学医学部微生物学）のセレクトで、今でも大変素晴らしいと感じます。英文誌の発刊にあつ

では消極的な意見も多く、ようやく日本感染症学会との合同刊行となったのは、2001年（平成13年）の小林宏行先生（杏林大学医学部）が日本感染症学会理事長になられた後でした。季刊でスタートした当初には、紺野一門が払った犠牲も大きいものがありました。先生が月間となった今日のJICの内容をご覧になりましたらなんとおっしゃるだろうかと思いを巡らせることがあります。

また、先生が理事長であった時の、新規抗菌薬の臨床評価法の確立もレガシーとしてあげられると思います。

先生は1980年（53歳）に心筋梗塞、1987年（60歳）に直腸がん（輸血後にはB型肝炎）、2000年（73歳）には冠動脈バイパス手術施行、2010年（83歳）には冠動脈ステント術施行、そして2017年（90歳）に直腸がんが再発し、温存療法で日常生活をすごしておられました。体調不良の日もあったようですが、それを感じさせることはほとんどありませんでした。亡くなられた後、使用されていたパソコンをご息子が整理したところ、ご自身の病歴について薬剤の服用も含め、すべてデジタルデータとして管理されておられました。そのような慎重さがあったからこそ、90歳を超えてもお随筆集（116ページ）や260ページにわたる膨大な医学思想史をお書きになることができたのだと思います。

私が40代のときに諸事情から研究を止めようかと悩んでいた時、先生から発せられたのは「人間死ぬまで勉強だ」という言葉でした。原点に戻って研究を続けることができましたが、先生ご自身が自ら実践されていたことでもありました。また、常日頃「自分達は私学の小児科や臨床病理という小規模の研究室である。MRSAのように社会に対してインパクトのある研究テーマを見つけ、パイロットスタディとして目途がついたなら、次の重要な臨床的課題を研究対象にすべきだ」というのが持論でいらっしゃいました。

先生の日常の言動から学んだことの一部を記して感謝の言葉に代え、紺野先生のご冥福をこころよりお祈り申し上げます。

慶應義塾大学医学部総合診療教育センター  
生方 公子